



富岡の生糸の歴史をひもとく

富岡製糸場総合研究センター 今井幹夫

NHKラジオ
明日へのことば
2012年10月10日

富岡製糸場は明治5年(1872年)、明治政府が日本の近代化のために最初に設置した模範器械製糸場です。赤レンガ工場が当時のまま残っている。明治を代表するモニュメント。2014年、世界遺産登録の予定。

江戸時代末期に鎖国政策を変えた日本は外国と貿易を始めました。当時最大の輸出品は生糸でした。輸出の急増によって需要が高まった結果、質の悪い生糸が大量につくられる粗製濫造問題がおき、日本の生糸の評判が下がってしまいました。

明治維新後、政府は日本を外国と対等な立場にするため、産業や科学技術の近代化を進めました。そのための資金を集める方法として、生糸の輸出が一番効果的だと考えました。そこで政府は生糸の品質改善・生産向上と、技術指導者を育成するため、洋式の繰糸器械を備えた模範工場をつくることにしたのです。

明治3年、横浜のフランス商館勤務のポール・ブリユナ(Paul Brunat)らが 武蔵(むさし)・上野(こうずけ)・信濃(しなの)の地域を調査し、上野(今の群馬県)の富岡に場所を決定しました。

- ①富岡付近は養蚕が盛んで、生糸の原料の繭が確保できる。
 - ②工場建設に必要な広い土地が用意できる。
 - ③製糸に必要な水が既存の用水を使って確保できる。
 - ④燃料の石炭が近くの高崎・吉井(よしい)で採れる。
 - ⑤外国人指導の工場建設に地元の人たちの同意が得られた。
- 以上のような理由により、富岡に建設が始まりました。

富岡製糸場は、殖産興業を推進するために国が建てた大規模な建造物群が現存する産業施設です。繰糸場(そうしじょう)は長さ約140.4メートル、幅12.3メートル、高さ12.1メートルで、当時、世界的にみても最大規模でした。

工場建設は明治4年(1871年)から始まり、翌年の明治5年(1872年)7月に完成、10月4日には歴史的な操業が開始されました。繭を生糸にする繰糸工場には300人取(ど)りの繰糸器(そうしき)が置かれ、全国から集まった工女たちの手によって本格的な器械製糸が始まりました。15歳から20歳が主で、11歳の子もいた。一日7時間45分労働、日曜は休み。当時のフランスは14時間労働・・・フランスより進んでいた。食事、寄宿舎、医者つきで一等工女は1円75銭、二等工女は1円50銭(現在の3~4万円) 工女のための夜学、日曜学校が開かれたという隠された歴史がある。殖産興業の中味はあまり知られていない。

明治政府は外国人指導者としてフランス人のポール・ブリユナを雇いました。ブリユナは建設地を富岡に選定し、フランスから製糸場に必要となる技術者を連れてきたり、洋式の器械を日本人の体格に合うように改良したものを注文して取り寄せました。

建物の設計は横須賀製鉄所建設に携わった同じくフランス人のオーギュスト・バステアンが担当しました。尾高惇忠(おだかじゅんちゆう)は政府の役人として建設当初から関わり、建築資材の調達に尽力するなどしました。尾高は後に初代場長となり、娘の勇(ゆう)を「工女1号」として入場させました。

主要な建物は、木の骨組みに、壁に煉瓦を積み入れて造る「木骨(もっこつ)煉瓦造(れんがぞう)」で建てられました。煉瓦という西洋の新しい材料を取り入れながら、屋根は伝統的な日本瓦で葺くなど、日本と西洋の建築技術を見事に融合して建てられました。

外国人指導者が去った明治9年以降は日本人だけで操業されました。官営期を通しての経営は必ずしも黒字ばかりではありませんでしたが、高品質に重点を置いた生糸は海外でも好評でした。

器械製糸の普及と技術者育成という当初の目的が果たされた頃、官営工場の払い下げの主旨により、明治26年(1893年)に三井家に払い下げされました。その後、明治35年(1902年)には原(はら)合名会社に譲渡され、御法川(みのりかわ)式繰糸機による高品質生糸の大量生産や、蚕種(さんしゅ)の統一などで注目されました。

昭和13年(1938年)には株式会社富岡製糸所として独立しましたが、昭和14年(1939年)には日本最大の製糸会社であった片倉製糸紡績株式(かたくらせいしぼうせきかぶしき)会社(現・片倉工業株式会社)に合併されました。その後、戦中・戦後と長く製糸工場として活躍しましたが、生糸値段の低迷などによって昭和62年(1987年)3月ついにその操業を停止しました。その後も場内のほとんどの建物は大切に保存されています。

繰糸場(そうしじょう)、東・西繭倉庫(まゆそうこ)、外国人宿舎(女工館(じょこうかん)、検査人館(けんさにんかん)、ブリユナ館)等の主要建物(国指定重要文化財)は、ほぼ創業当初の状態良好に保存されています。明治政府がつくった官営工場の中で、ほぼ完全な形で残っているのは富岡製糸場だけです。

今後は日本の生糸のブランド化が必要。シルクブランドをどう位置づけるかが今後の課題。